

## 楊心流の武術理論(武技と兵法)の内

## 武技の章(附武器について)

— 楊心流研究(其の三) —

長谷川 哲 郎

鎧かぶとで身を固めた戦国時代、及びそれ以前における集団戦闘の下では、体格、体力、氣力、風貌、地位、連といった事が個人の闘争技術を上廻る勝敗の条件であつた。従つて個人技術を主体とする武術流派は育たなかつたのに対して、江戸時代の秩序下社会において対等条件下で行われる技術を主体とする闘争は、当然流派と呼ばれる個人技術の発達を促し、又この技術が注目を浴びる事になつた。この時代の流派發生の条件となつたものを考えて見ると、

1 理論が先に作られて、その理論を基にして流派が作られる。

2 抜群の技術上の実力者が現れて、その人の実跡の上に立つて、流派が実現し、後で理論が組立てられる。

大別すると右の何れか、又は混合の場合である。然し武術の一派を称えるからには、当時の社会においては一応公表された勝負に勝つという実跡が、先ず先決問題であつたに異ない。そこで理論付けをする人間と、勝負に勝つ事の出来る人間が、同一人か否かの問題が出て来る。勿論同一人であればそれにこした事はないが、別人であつてもよい訳である。楊心流の場合明らかに別人である事は第一回の稿において説明した。

武術修業中に種々の流派とその理論を学び、その学んだものを基にして新しい理論付けを行ない、新しい流派を作る事は江戸時代後期に多く現われたが、僅かしかなかつた江戸時代初期の流派は、独自の理論を以つて出発したものと思われる。楊心流の当身、活法の裏付けとしての医学理論は、確かにこの流儀独自の特徵であり、易法、武技、兵法等の理論は、代を重ねる

に従つて遂次累加されて行つたものである事が、この記録の中にも記されている。己の流儀の理論や技術が他に流れたり、又将来利用される事に対する防衛手段として、極端な秘密主義が総ての流儀で行われた事は言うまでもないし、楊心流もその例に漏れない。

この稿はこの流儀創設当時即大江楊心が中国より移入した七手七活の内武技七手、即基本形「表の大事」七手、即「眞の位」を中心し、秋山義時によつて演釈工夫された十七手の手続きと、更に四十七手へと拡大された武技の解説を中心に武技理論を紹介した。(武器の項は後世城内友吉によつて付け加へられたものである)

## 第一章 武技理論

夫れ兵法の根元は唐にては軒轅（註）軒轅（註）という人は有熊國の人なり。委細は史記にこれあり日本にては天押なり。フツキ親王皇帝この人なり。)に始まり、我朝にては神代より始り尚人代に及ぶが如し。芸術世々相続き武門毎にこれを行ふという。これを尋ね見るに体術、柔術と称するもの数十家あるといえども、学ぶ者よく行ふ能はず、世々この法を修学すべき者は、進退手足の自由にして進むべきに能く進み、去るべきに能く去り、俱に勝負を決するも大成利ある故に、初学の輩業動（練習習）を為すべきものなり。其の数多し故にその大概を現わし陽と陰との勢を分つ、この勢理又千變万化に通ぜずという事なし。

### 朝暮心得べき大事

#### 一 兵法五習の事

夫れ兵道に五習という事あり。目習、耳習、心習、手習、足習なり。目には色を見、耳には音を聞き、心には工夫をなし、

手足には活動をなす。その大要の各を言へり。

## 二 兵法三亡の事

夫れ兵道に三亡という事あり。一つには乱るるを責めて納む。二つには邪なるを責めて糺す。三つには逆様なるを責めて素直にするの義なり。

## 三 兵法習うの後動行の事

夫れ第一に殺活の大事並びに先師より伝来の趣を伝受し来りて、後捨て置くべからず。捨て置けば不習に等し。又忘れざると言へども業動（練習）を為さざれば敵に向いて危うし。故に常に工夫し鍛練を為して勤め行うを本とす。我十有五より三十に及んでこの道を行うといえども、いまだ達せず。体術の奥義、胴積の伝授は嗚呼夫れ難きかな。

## 四 陰陽強弱の事

夫れ敵を計るに陰陽強弱の差別あり。先ず陰敵というは、その形静にして外見には弱き氣色に見え内に強き所あり。陽敵というは、その形騒がしくして外見には強き氣色見え、入りては弱き所あり。然も学ぶ者変化を用ふるとすれば強中弱の色を現わす者なり。

## 五 敵我の後より来るを開く事

夫れ敵我が後より来りて言葉をかけ打たんとする時右へ開きて利あり。

## 六 群集の中にて敵を捕う時心得の事

夫れ諸人群集の中にて敵を捕うべき時、諸人を後に受けざる様に動くべし。後に人ありては必ず勝利を得る事難し。常に後には立木等を受けて、又家の中などにては柱或は壁等を己が後に受くべし。心得あるべき義なり。

## 七 相討ち勝負の事

夫れ相討ち勝負をいうなり。かねて心得あるべし。我は手を切らせ敵の首を斬る。我は外を切らせ敵の内を斬る。我は左の

手を切らせ敵の左の足を斬る。

#### 八 遠道を来た敵を捕うべき心得の事

夫れ遠道を来た敵を捕うには氣を奪いて討つべし。その理は遠道を来る者は性氣疲れ、身体くたびれ働く事不自由なり。然れども智ある敵は動かずして勝利を計る故に氣心を奪う利を専らとす。身は心に引かれ心は氣に引かるる故に、氣動くは心動くの理なり。あえて輕する事なかれ。

#### 九 絶道心得の事

夫れ絶道と言うは、左右後の三方には道なく前には敵多くあるを言うなり。然りと云へども少しも不可能と思ふべからず。死を本として各を残さん利を計るべし。又伝に曰く兩側は川或いは池或いは深田等の類にして、後は險山なるときは、去らず退かずして利を計るべし。又兩側に山ありて後に池あるときは、先に山に登つて利を得るべし。

#### 十 不動敵の事

夫れ不動敵と言うは既に兵器の鞘をはずし、戦機を欲する時に及んでも去らず来らず、色をも変えざる敵なり。斯くの如き敵には利なくしては急に討つべからず。兵器を以つて心を奪う事を計るべし。まさしく心を奪う能はざる時は退りて利を得て捕うべし。又敵兵器の術に心奪われ、その色変ずれば討つに利あるべし。

#### 十一 逃亡者を捕うべき時の心得の事

逃亡者を捕うべき時は、先ず侍か下人かをよく見分け、侍なれば即時に捕うべき事なり。下人は時刻を延ばして捕うべし。侍は憶したる事なし。其の場を逃れ何時の時になりても生命を惜しむ事なし。下人は時刻遅るるに従いて生命を惜しむ故に次第に心憶する事を以つてなり。

#### 十二 捕うべき敵に出合い勝利心得の事

日中に心得の事。月夜に心得の事。闇夜に心得の事。(口伝)

## 十三 天地人三道の事

天地人の三道はすべての要道なり。拵術家には身、口、意の三つあり。武門には智、仁、勇の三徳あり。よつて柔術家においては、学ぶ者は専ら形を離れて柔らかに敵に掛り、敵の身体をなやます事を基とすべし。他流には鎧組打ち、或いは投げ捨て、等の流義あり。即これを柔術と称する者なり。

## 十四 学ぶ者心得の事

世に伝ふる所楊心一流無別なり。夫れ楊心流は天地人の三道を以つて楊柳心を本体とす。強弱の敵に向うにも任身、殺、活の三道あるを以つてなり。世に拵術と号すもの敵を捕ふるに殺すより他なしと伝え来るものあり。実に殺活の大事心得べき大事なり。

右十四ヶ条の心得の大事固く相守り修学有るべき者なり。

## 三徳の章 天の巻



日月天大聖天満大自在天神、夫れ兵法は思成なき事寂然たり。動を感ぜず、終に天下の故に通ず。誠天下の至真にあらざる者は誰か能くこれを願う。

○武士のひとしき法を帛にして、祚れば守る菅原の神。

○とられては舟の心に身をさして、浪にまかせよ風にまかせよ。

○敷嶋の道亦絶ねなかなかに、北斗の星の我身なりけり。

扇半の日は右より左、又左より右。調の日は左より右、又右より左。右の大事固く相守り他見他言これあるまじき者なり。

### 地の巻

夫れ兵道を以つて一体の心は無別なり云々。取るなかれ敢て恐るなかれ。無道天地陰陽の理を以つて人間の身体五臟六腑を和らげ、我が心中に天の理を傑然とし以つて眞心を明らかにすべし。これ皆無我無心の道理なり。これによつて常に邪心を離れ、本心を明らかにしてこれを信じ一大事を観るべし。尋常心の方法に通用して正に無心と思ふべし。この理は自在に通用す。これに依つて勝負の正しきを知るべし。例へば敵文武二道に通じ或いは敵百万の勇者たりといへども、無我無心の体には近づく事能はず。無我無心を持つ時はこゝに勝の利あり。諸芸共に心の徳を以つて進むものは、心に信を用ふる故一旦危く見えても終には徳の勝あり。この理は心に正しゅうして三所の大事を学ぶ故なり。三所の義は生事といえども、参得聞にいつて極秘し大事の義なり。例へば一國一人の武芸者に出合い候ても、敵に心易く近づく事易し。敵又我に近附くといえども心に動ずる事なく、敵も我、我も又敵の差別なく同一の理なり。例へば我を捕らんと欲する者には、身を任せて敵の好む所をとるべし。勝つも負くるも掛けざる先受けざる先敵と我との間にあり。勝を好むにあらざる負をくやむにみならず。その時の変化に應じて有り。敵にまさに勝たんと思ふ時、前三所の大事を以つて烏兔、明星、釣鐘を以つて殺すべし。敵進んで掛らば無心にして我に近付かすべし。敵進まざる時は、又無心にして我敵に進むべし。敵をよせ敵に進む時は、又仕掛によつて敵の変化に従つて殺すべし。この三所を会得してひとえに心中に持ち学び用いる時は万の勝あり。業（技）を以つて勝つ事は理の勝。徳を以つて勝つ事は信の勝。これ即中檀において相伝う時は、三つの伝としてこれを免ず。

- 一、烏兎の暗。
- 一、明星の暗。
- 一、釣鐘の暗。

無我の体(身、口、意)の事(三所の大事)

右この一大事は中檀伝授の者たりといえども、他見他言あるまじきものなり。実に修力功を為さざる者はこれを軽んじ我が身を害する事多し。この理に徹して学び用いざる時は必ず勝つと言ふ事なし。是を以て我が三所の大事というなり。

人の巻

夫れ仁は万物の靈なり。兵家の術幾流あるかを知らず。実に秘事は睫の如し。世人能く泰山を見、睫を見る事能わず。百尺の竿頭に一步を進むる。底田の地に到って將に始めて権柄手に在って殺活時に臨むべし。学ぶ者夫れ容易に看を為すこと勿れ。一段の大事に到っては一子相伝の他必ずしもこれを伝えざる者なり。世に体術、柔術と称するもの数十家ありといえども皆般々の輩のみ。蝦蛄螺蚌問うに足らず。楊心流極秘奥義の伝は胴積の伝授に明らかなり。

○七ヶ条の大事

- 一、松風、村雨の大事
- 一、稲妻の大事
- 一、烏兎の暗の大事
- 一、独鈷の大事
- 一、琢磨の大事
- 一、明星の大事
- 一、釣鐘の大事(附水月一と足去らずの事)

右の大事は知仁勇の三道並びに修力不成功者えは伝授これあるまじきことなり。専ら身を修め家を始め國を治むる要道なり。

(I) 基本形七手(表の大事)

- 1、真の位。
- 2、無刀別。
- 3、袖車。
- 4、膳越。
- 5、暫心の目付(抜身の目付)。
- 6、車固め。
- 7、見刀の曲。

(メて七手)

(II) 御前捕り

- 1、手金記。
- 2、胸固め。
- 3、甲廻し。
- 4、小車。
- 5、両手結び。
- 6、大固め。
- 7、身砕き。(メて七手)

(III) 立合い捕り

- 1、請別れ。
- 2、稲妻。
- 3、帯車。
- 4、車捕り。
- 5、車返し。
- 6、雪折れ。
- 7、袖返し。
- 8、当の金。
- 9、胸合せ。
- 10、谷落し。
- 11、梅の枝折り。
- 12、岸石。
- 13、夢打ち。
- 14、簾詰め。(メて十四手)

(IV) 行合い捕り

- 1、皆籠美。
- 2、手記金。
- 3、大碓。
- 4、行返し。
- 5、向山影。
- 6、脇山影。
- 7、後山影。
- 8、駒返し。
- 9、虎走り。
- 10、攀噌捕り。
- 11、攀噌搦め。
- 12、紅葉乱。
- 13、糸車。
- 14、月見。
- 15、下り藤。(メて十五手)

真之位





(V) 後捕り

- 1、順風。
- 2、小返し。
- 3、右巻。
- 4、稲妻。
- 5、月影。

(ア) 五手

是より相弟子へも秘し候事、右四拾八手相濟候上暫らく見合せ、次の手合せ伝授候事なり。

(VI) 追掛捕りの事

- 1、独鉗。
- 2、引き分け。
- 3、滝落し。
- 4、月山影。
- 5、返し車。

(ア) 五手

(VII) 壁添捕り

- 1、袖車。
- 2、甲廻し。
- 3、引出し。
- 4、手棒捕り。
- 5、膳越し。
- 6、脇山影。
- 7、車返し。
- 8、稲妻。

(ア) 八手

○技の解説（基本形、表の大事）

1、眞の位

- (イ)、片羽折り。 (ロ)、忽死。 (ハ)、大当て。 (ニ)、小当て。 (ホ)、手綱固め。

- (ヘ)、引分け。 (ト)、両手詰め。 (チ)、虎詰め。 (リ)、四方固め。 (ヌ)、龍虎

詰め。 (ア) 十手

○固めの手続き

○片羽折り、こかして起こし、右の手をとり打たせ、飛び越え、相手の左の手

毎刀別



を首に掛け、腰を踏み、相手の右の手を引き上げて固むる。

○忽死

こかして、己の右脇に起こし相手の左の手を取り、己の前に引きつけ下に押し固むる。

○大当て

こかして起こし、左の手を取り左に打たせ、向うへ飛足にて当たり、又飛び戻り足にて当たり、後は片羽折りの通り。

○小当て

こかして起こし、右に打たせ飛びこし足にて当たり、後片羽折りの通り。

○手綱固め

こかして起こし、右に打たせ飛びこし、引き起こし左の手をとり、打たせ相手の左の手を自分の二の手の上にかけて、馬乗りになり、相手の右の手と一諸に固むる。

○引き分け

こかして起こし、右に打たせ相手の右の手を、己の二の腕に掛け、左の手を執り引き分くる。

○両手詰め

こかして起こし、右に打たせとび越し起こして左に打たせ、とび越し起こして胸固めに固むる。

○虎詰め

相手が足で蹴って来るを、己の左の足にて蹴除け、こかして起こし右に打たせ、手をはね込み仰向けに寝かせ、襟にて固むる。

○四方固め

こかして起こし、右に打たせ、起こし左に打たせ、四方(四所)にて固むる。



○龍虎詰め 飛び替りて摺り込み、襟絞めを計り詰むる。  
2、無刀別

(イ)、陰車。

(ロ)、陽車。

○固めの手続き

○陰車 こかして向うへ突き廻し、起こし、右に打たせ手をはね込み、仰向きに寝せ襟にて固むる。

○陽車 こかして敵よりこなたの顎を打つをかわして、前にひきかえし、起こして右に打たせ、片羽折りにて固むる。

### 3 袖車

(イ)、巴固め。

(ロ)、胸固め (変化七手)

○巴固め こかして起こし、左の手を取り打たせ、相手の左手を己の左の上よりだき込み、相手の右の手をとり起こしてだき込み、右の足にて腰を踏みつけ固むる。

○胸固め ○相手が左の手にて打ちかゝるを、臂を取って突き返し起して固むる。

○相手が足をかけ、手を取って返して来るを、臂を摺り込み返し起して固むる。

○相手が脇へ抜けるを押し付けて起し、左にて固むる。  
○相手が後へはねるを摺り込み起して固むる。



○相手が蹴つて来るを、

蹴り除け、

こかさずし

て胸を固む

る。

○相手が足に

取り付くを

襟を取つて

突き廻し胸

を固むる。

○相手がから

いて投げる

を、投げら

れ起きて固

むる。

4 膳越し

(イ) 左右打ち分け。

(ロ) 四つ打ち絶ち。

見  
刀之  
曲



(イ)、八つ打ち絶ち。

○左右打ち分け　こかして起こし、右に打たせ、跳び越し起こし、左に打たせ跳び越し起こし、又右へ、又左へ、又右へ、又左へ起こして固むる。

○四つ打ち絶ち　○こかして起こし、右の手首を取り左に四つ打ちさせるなり。

○こかして起こし、左の手を取り左に打たせ、帯を一諸に引き締め四つ打ちさせるなり。

○八つ打ち絶ち　○こかして起くる時、三つ四つ廻し、襟にて棍を取り、突き起こして固むる。

5 暫心の目付 (抜身の目付)

(イ)、右剣。 (ロ)、左剣

○右剣　こかして起こし、右に打たせとび越して左の手を首に掛け、腰を殴り向う側の大刀に引掛け固むる。

○左剣　○こかして起こし、相手の左の脇下に柄を掛け固むる。

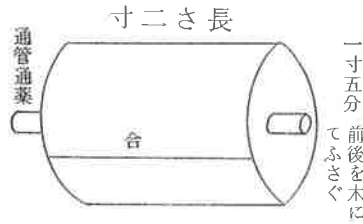
○こかして起こし、左の手を取り、打たせて自分の右膝に相手の左の手を上げ、相手の右の手を上より柄に掛け固むる。

6、車固め

○車固め　こかして直に右の手で十五六も打ち車に固むるなり。

7、見刀の曲

1、手火車



一寸五分 前後を木にてふさぐ

通管は二寸余り

通葉は、紙をさきて、こよりにして入るゝ。火移りの所は鉄砲の薬粉にしめし使用する。

煮紙は麻の灰五匁。煙焼一匁。水に入れ煎す。杉原紙を煮て使うなり。

鉄の筒を作りて二つに割り合わす、前後に鉄砲の薬をつめ、中間に薬を詰め火を移すなり。両口の薬は深さ五寸ほど詰め、又前後の口にも薬を詰め中間に小菱の鉄釘四五寸ほど詰め、或いは焼薬を入れるゝ事あり。

(口伝) 右の外粘土を以って筒を製する事あり。何れも筒を刀にて三辺ほど叩く大事あり。忍び、夜討に用う。

2、天火筒



五味の薬 煙焼 九匁。 硫黄 九匁。 正腦 百匁。

百薬 三ヶ。 石膏 一匁。

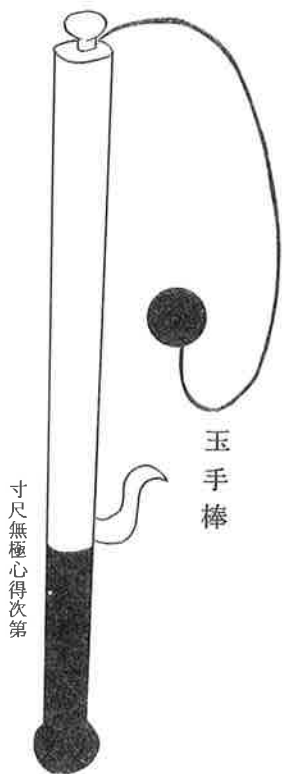
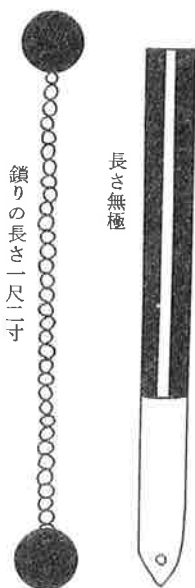
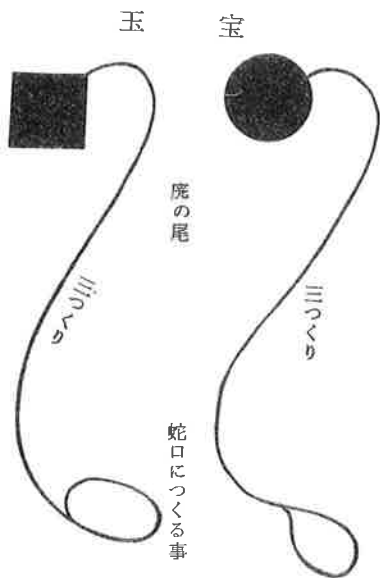
竹の上皮を削り、薄くして上を紙にて張り作る。

製法 良き焼酒を五味の薬と合せ丈夫に練りつむるなり。大風大

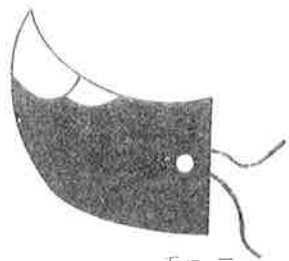
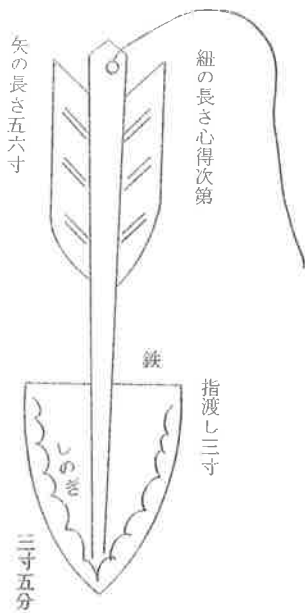
雨にも消えざる事妙なり。尤も水中にも用ふるなり。

3、懐中火

○白明礬を紙に五六ヘンひき、日に乾かし、挽茶を灰にしてその中に常のたどんをおこして火を中に埋め包むなり。  
4、楊心流武器



飛 劍



飛劍 鶴羽を用ふるなり。矢柄の中に悪魔を払う明劍の歌を書き入るゝなり。劍仕立てたる後巻藁に打込みつり合わすべし。まことつり合えば、矢の仕掛による物なれば大事にするなり。矢の根製する時随分鉄を鍛へ念を入るゝべきなり。悪獣の類この劍を揮う時甚だ恐れをなす。虎狼山犬の類この劍を以って向う時当たらざるなし。

捕菜あらしの法 (三箇の秘密)

- 胡七こぢ 青 (陰干) 五匁。
- 天南星てんなんしやう 上同。
- 川蜋かむしの白焼 四個。
- 淡竹葉たんちくえつの黒焼 一個。